HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	太宰治文学の研究 [全文の要約]
Author(s)	唐, 雪
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第13406号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/74480
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Xue_Tang_summary.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

博士論文の要約　　太宰治文学の研究

唐　雪

太宰治の文学に関する研究はすでに豊富な蓄積があり、現在でも着実に進められている。初期の作家の実人生に密着する実証的な研究の段階を経て、次第に語り論、精神分析、フェミニズム理論とジェンダー批評、構造主義、ポストコロニアリズム、国民国家論など、多種多様な文学理論と多方面の視点に基づく研究が盛んになされてきた。

ところで、太宰文学を比較文学の視点から研究した主要な論考として、九頭見和夫『太宰治と外国文学：翻案小説の「原典」へのアプローチ』（二〇〇四・三、和泉選書）がある。同書は「走れメロス」などの翻案小説を取り上げ、太宰文学とドイツ文学を中心に論じたものである。ただし、素材となった原典の研究が緻密である反面、太宰作品それ自体の独自性への目配りはいささか不十分であるように思われる。また、太宰文学の全体像を把握するためには、習作期から晩年に至る他の作品を視野に入れる必要がある。

本論文は主要な先行研究を参照しつつ、太宰文学におけるマルクス主義、キリスト教と聖書、海外文学の受容を検討するものである。論文は三部構成となっており、具体的な研究方法としては、比較文学の理論を援用し、時代順に沿って国内外の時代情勢を念頭に置きつつ、太宰文学の生成の過程とその過程における変容を検討する。

最初の第一部では、ほとんど闇に葬られた存在である習作期に照明を当てた。とりわけ三部作とみなせる未完の長編を取り上げて、昭和初年代の太宰とその文学に浸透したマルクス主義の意義を検討する。

第一章「家長告発の回路―『無間奈落』論」では、語りの機構、主要な登場人物のセクシュアリティを考察し、女性嫌悪と女中思慕という矛盾した感情が太宰文学に同居していることを指摘し、女中をめぐる姿勢に大村親子の相剋ならざる親和的、共犯的関係を指摘した。

第二章の「異色の農民文学―『地主一代』論―」は小作争議が頻発した昭和初年代に書かれ、時代の風潮と太宰の思想的傾向をある程度窺わせる作品である。しかし、作品の内容は露悪的、自己顕示に著しく傾斜した書き手「私」の心情に終始しており、明快かつ確固としたイデオロギー的な主義主張を全面に打ち出すプロレタリア文学とは程遠い。とはいえ、内容において一種の異色の農民文学として位置づけられる。また、形式において後年の太宰文学を特徴づける自作引用と手記形式の先駆けである。

第三章「迷走する闘争劇―『学生群』論―」では、校長追放をめぐって異なる立場に立った学生たちが展開した青春群像劇の様相を分析し、複数の視点から多彩な学生群を描き分けるという複眼的な思考を小林多喜二『地主一代』、徳永直『太陽のない街』に学んだ創作方法として論じた。

続く第二部では、書簡体、日記体など太宰が最も得意とする第一人称語りの形式に注目し、キリスト教・聖書と深く関わっている作品を取り上げる。

第四章「『風の便り』における文学論と聖書」は、往復書簡の形式を活用し、国策文学としての農民文学と歴史離れした歴史小説に対する批判、『旧約聖書』の『箴言』の引用、「出エジプト記」のモーセ像への評価を繰り広げた。創作の源泉としての聖書への太宰の関心は新約から旧約へ、イエスからモーセへと移行したことが顕著に表れた。

第五章「『正義と微笑』の日記体形式と聖書」は、敬虔なキリスト教徒で早熟多感な少年の俳優願望とその願望の結実の過程を日記体で描く。日記の中に『旧約聖書』の『申命記』の解釈、イエスとモーセの人物像の比較論に、聖書への理解を深めていこうとした太宰の心情が滲み出ている。

第六章「『パンドラの匣』の戦後表象とキリスト（教）は」作品の成立事情を整理し、新聞連載と書簡形式との相乗効果を論じ、次に「葉桜と魔笛」「満願」『斜陽』など太宰的結核小説の特質と系譜を列挙し、続いて教養小説として本作を位置づけ、さらに玉音放送、英語の優位性、婦人参政権、自由思想などの時事問題、戦後表象を逐一考察し、最後に自由思想とキリスト（教）との関係を複数の歴史的事実に基づいて分析した。

第七章「『トカトントン』における虚無主義と聖書」は太宰文学の脱線的特質と系譜を指摘したうえ、虚無主義の克服に役立つはずのキリスト教への帰依、もしくは聖書の読解の勧めという受信者「某作家」の返信が発信者にどう受け止められたか不明のまま、つまり一種宙づり状態に置かれたため、十分に機能しなかったと論じた。

第三部では、太宰文学における海外文学の受容を検討する。第八章「太宰治とシェイクスピア―『新ハムレツト』を中心に―」では、太宰は『ハムレット』に代表されるシェイクスピア文学のナンセンス的性格を十分に読み取り、自身のナンセンス文学への志向と結び付けて、道化役者に勝るとも劣らないハムレットをはじめとする人物群と彼等が織りなす錯綜した物語を作り出し、『新ハムレット』を悲劇ならざる喜劇に仕上げたと論じた。

第九章「昔話・ギリシャ神話から近代小説へ――『お伽草紙』論―」では、太平洋戦争の最中に構想、執筆した『お伽草紙』所収の四つの話「瘤取り」「浦島さん」「カチカチ山」「舌切雀」、及び除外された「桃太郎」を逐一分析した。ジッド、ドストエフスキーから学んだメタフィクションの手法を取り入れた本作は、原典となった『御伽草子』や絵本に満ち溢れた教訓臭を脱色し、全編を貫く荒唐無稽な人物（動物）の関係設定、ユーモラスな語り口はこの作品を日本文学史上の類まれな滑稽文学に至らしめた。また、現代人の心理を深く抉り出す点において優れた心理小説ともいえる。

第十章「太宰治と魯迅―『惜別』を中心に―」では、発表当初から長い間、皇国賛美、時流迎合の言説が顕在化した作品とみなされ、国策小説として否定的にのみ論じられてきた『惜別』の研究史を整理したうえで、先行論ではそれほど注目されてこなかった作中におけるキリスト教・聖書、とりわけ「出エジプト記」の役割、及びそれがどのように魯迅の文学観、民衆観、革命思想と結び付いたかを論じた。『惜別』は小田獄夫、竹内好など同時代の魯迅研究者による伝記に基づきながらも、それらとまったく異なった太宰の的確にして独特な魯迅理解に基づく魯迅像を描き出しただけでなく、どの時代に

おいても、政治に圧倒される文学の立場の弱さを物語る歴史的な証拠でもある。

第十一章「太宰治とチェーホフ―『斜陽』を中心に―」では、『斜陽』の成立過程におけるアントン・チェーホフの『桜の園』と太田静子の『斜陽日記』の役割を検証し、『斜陽』の主題独自の創作手法、及び文体的特徴を論じた。『桜の園』に描かれる没落貴族の生態に心を惹かれ、太宰は敗戦後の農地改革による生家津島家の没落と重ねて、象徴性に富む優雅で感傷的な『斜陽』の世界とその世界に生きる人間を描き出した。

また、手記形式の体裁を採った『斜陽』は単純素朴な『斜陽日記』とまったく異なり、単線的、直線的な物語を展開せず、手紙、日記などを作中に交えながら、空想、追憶、夢など書き手・かず子の深層心理を意識の流れの手法で探った。

以上、各章の分析を総合して、以下の結論を導き出すことができる。すなわち、ゲーテが晩年に提起した「世界文学」という概念を参照し、太宰文学は日本文学の伝統に深く根差すとともに、特殊の時代が生み出した異端児であるとともに、人間心理の深淵を凝視する普遍性に富む点においては一種の世界文学であるといえる。

今後の課題として、天才論を含めて、ほとんど空白状態と言ってもよい太宰とドイツロマン派との関係を中心に研究を進めていきたい。と同時に、太宰を悲劇的、あるいは典型的な「破滅型の私小説家」（平野謙）として捉えるという、あまりにも紋切り型の固定観念にもはや別れを告げる時が来ている。今後の太宰治文学の研究は、太宰テクスト全般の奥底に内在する喜劇的精神という貴重な鉱脈に照明を当て、その発掘作業を持続的に進めなければならない。